サルヴァムダダ王（一切布施王）の物語／ゴーパーラ龍調伏物語／仏塔物語／プニャバラ王物語

――『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第55・56・57・58章和訳――

引　田　弘　道

サルヴァムダダ王（一切布施王）の物語
――『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第55章和訳――

本章は既に岡野潔氏によって，その校訂と和訳が為されている[1)]。またシビ王に関する文献のモチーフごとの分類も既に同氏によって行われている。このモチーフの研究は既に町田氏や松村氏によってなされている[2)]。本テクストの主人公であるサルヴァムダダ王はシビ王ではないが，モチーフ的には類似性が認められる。また『六度集経』（大正 3，1b–c）に主人公は「薩波達王」として鳩を助けるため，インドラ神の化身である鷲の求めに応じて自分の肉を切って与え，最後には身体すべてを布施し，真実語により元通りとなったとあり，猟師と鷲との違いはあるものの強い共通性を示す。また M. ハーン博士が指摘されている Gopadatta に帰属する Jātakamālā には Sarvaṃdada という章が存在する（M. Hahn, “Gopadatta’s Jātakamālā. On the first complete edition of its 16 extant legends,”『印度学仏教学研究』第55巻第 3 号，1043–51頁）が，この物語は『大智度論』（大正25，1466）の「薩婆達王」のそれに類似する。この王の物語については，É Lamotte の仏訳（pp. 714–15）の他，Ratna Handurukande, “SARVAṂDADA, THE ALL-GIVER”『仏教研究』第10号（昭和56年）165–178頁に詳しい。

岡野氏の訳の特徴は本分中の幾つかの偈に認められる言葉の二重の意味（śleṣa）を忠実に翻訳された点であろう。私訳では，岡野氏の指摘する二重の意味の解釈は注に回した。今回も伊藤正見氏と一緒に翻訳を行った。

あらすじ

0．自らの身体を布施する者を賞賛するのに適当な言葉は見当らない。(1)
1．仏陀はガータとウパガータカという 2 人の羅刹を調伏。(2)
2．インドラ神は仏陀の微笑の原因を尋ねる。(3)
3．サルヴァムダダ王（一切布施王）は巡察のため，王宮の外庭や謁見の間に行き，政務をとる。(4–9)
4．鳩が王の下に保護を求める。(10–12)
5．インドラ神は王の善性を確かめるため猟師の姿をとって，王に鳩を返すよう求める。(13–19)
6．王は猟師に殺生の罪を説き，代わりに王の食を与えようとする。(20–24)
7．猟師の反論。豪華な王の食事より慣れた食事こそ猟師に相応しい。(25–29)
8．猟師は王自身の肉を鳩の 2 倍分だけ切り取るよう提案する。王の快諾。(30–36)
9．王は自身の肉体を与えることを決意する。(37–39)
10．ダールナマティは王の肉体を切り裂く。(40–44)
11．王，身体ごと秤に乗り，自身を布施しようとする。(45–48)

12．王の真実語と肉体の回復。(49–55)
13．過去世と現世の結節。(56)

和　　訳

自身の身体の布施者を賞賛するのに適当な言葉なし

如意珠は（cintāmaṇiḥ）実に志向した（vicintita-）物を与え，如意樹は（kalpadrumaś）まさに念じた物を（vikalpitam）生み出す。
身体を布施するのに適した時に自ら心の準備をした人を賞賛するのに，どのような適当な言葉があろうか[3)]。(1)
ガータとウパガータカという（Ghāṭopaghāṭakau）興奮した 2 人の羅刹を（guhyakau）[4)]調伏して（vinīya），師は（śāstā）ケーシニーの森から（Keśinīkānanād）姿を消して（antarhito）別の森へと行かれた[5)]。(2)

インドラ神，仏陀の微笑の原因を質問

過去の出来事を思い出して微笑んだ顔をされていると，その微笑の原因をそこでインドラ神によって質問され，彼（の師）は心をうちとけられて再び言われた。(3)

サルヴァムダダ王の巡察

昔，サルヴァーヴァティー（Sarvāvatī）という名前のあらゆる富の住居である町があった。(町は）空中に聳え立つ宝石の邸宅の輝きを誇っていた（aṃśuhāsinī）[6)]。(4)
その（町）にはサルヴァムダダ（Sarvaṃdada）という，清き光を放つ卓越した王がいた。というのも彼の名声は三界を照らす月光のように（tribhuvana-jyotsnā）昼夜輝いていたから。(5)
善行の精髄という優れた状態によって輝きを享受し，戒律の道を確固として進む善き姿を持つ，
象の主のような人を賞賛する言葉は（sādhuvādaḥ），（さらに）布施によって勝利を飾る太鼓のような状態となった[7)]。(6)
ある時，彼（の王）は臣下の仕事を巡察するという恩恵を与えようとして，地上のインドラ神である（bhūmiśatakratuḥ）（王は），（王宮の）外庭や謁見の間に行った[8)]。(7)
そこで無数の近隣の王たちの王冠の宝石に彼の姿が反映されて，まるで無数の身体をもっているかの如く，（王は）地上の仕事の内容を聴いた。(8)
要望者たちは前にかがんで，月長石よりなる（candrakāntamaye）彼の足のせ台に映ったが，（王との謁見後）再び思い煩うという苦しみを（cintātāpaṃ）捨てた。(9)

鳩，王の下に保護を求める

その間，羽を焼かれて寄る辺がないかのように[9)]，上から落ちてきた鳩が，王の股の元に飛び込んできた。(10)
彼の（鳩が）より恐れ慄いて動揺した目をし，肢体をちぢこまらせたのを見ると，王は急に憐憫の情に（dayā-）支配された。(11)
彼は満開の蓮華の揺れる[10)]蓮池のような輝きをもって，「この（鳩の）恐れはどこにあるのか。」と，素早く目で四方を見回した。(12)

インドラ神，猟師の姿をとって鳩を返すよう求める

その瞬間，インドラ神は（彼の）善性を（sattvaṃ）確かめようとして，幻惑で（māyayā）猟師の姿をとり，王に近づくと言った。(13)
「王様，ついに捕らえた，私の食物である鳥を放して下さい。これが私どもの生来の活動であり（vṛttir），止まることなく（anivṛttir），誰に強制されたものでもありません。(14)
王様，これが私の生来の（nisargasiddham）食物です。（この食物）を捨てる者には生命は（jīvitaṃ）ありません。というのも生気は（prāṇā）食物に依拠しているからです。(15)
食事をとらないことより私が命をすてようとするその瞬間に，私の妻は子供ともども望みが絶たれてなくなってしまうでしょう（vinaṃkṣyati）。(16)
１つを保護するばかりに多くを滅亡させてしまうようなことが正義であるとするならば，正義を本質とする人よ，その場合にどのような正義に反することが（adharmas）ありましょうか。(17)
鳩への愛情のゆえに私を憎まないで下さい。というのもあなた様のような方は原因に執着することによって行動を起こすことはない（はずだ）からです。(18)
この（鳩）のように私もあります。（鳩も私も同じです。）あなた様にとって私たち２人にどんな区別がありましょうや。善人はあらゆる生き物に平等であって，一方だけに憐憫の情を起こさないものです。」(19)

王，猟師に殺生の罪を説き，代わりに王の食を与えようとする

このように彼（の猟師）によって言われたが，王は（股の元に）隠れた鳥を，腕輪の音をたてる手で覆って，「恐れるでない」と言わんばかりであった。(20)
そして王は，あらゆる生き物の苦しみから守るのに最適な機会を捉えて，湿った（snigdha-）雨雲の音のような深い声で言った。(21)
「汝は一瞬の快楽を求めて恐ろしい，生き物の殺害（という行為）をしてはならない。身体ある生き物にとってこの生気への愛着は，死や苦しみに（-vyathāvikāro）等しいものだ。(22)
他の生気を奪うことによって生計が（vṛttiḥ）なされる場合，それは善なるものの（śreyasāṃ）停止である（nivṛttiḥ）。というのも（それは）罪の苦しみを与えるから。(23)
まさに今，（汝）本来の希望が断たれることなく，（その希望に）沿うよう注意を払われた[11]，私の為に用意されたどんな食事でも受け取りなさい。」(24)

猟師の反論，王の食事より慣れた食事こそ自分に相応しい

以上の王の言葉を聞くと，猟師は顔を曇らせて，ため息をつきながら，豪華な（vara-）[12]食事に気が乗らずに，答えた。(25)
「私どもは森の住人ですので王様の食事の味を知りません。というのも鹿は草の食事に慣れているので，お菓子を喜びません。(26)
砂漠によくある，葉のない棘のつる草を得ることなく，びっしりとタマーラ樹の生えた森にいては，若いラクダは（karabhaḥ）苦しみで非常に弱ってしまう。
烏はよく熟しているマンゴーの実を（cūtaṃ）まるで毒であるかのように食べない。種々の本性の違いのため，この世では慣れたものこそすべての者に幸福を与えます[13]。(27)
今，王に相応しい食事を賞味しても，どうして明日再び（それを）私は賞味しましょうか。別の日にも得がたくない物，それを食べれば（tad bhuktaṃ）[14]幸せが得られます[15]。(28)

実に滋味に富んだ食事に慣れた者は味のない（食事を）とらない。多くの従者たちの（集まる）仕事に携わっている者は，１人では耐えられない（na tiṣṭhati）。
車に乗った者は両足によって進む時により（tarām）悲しむ。得た利益を取り逃がした者は（avāttārthabhraṃśaḥ）[16]つらい苦しみで荒れて（身体を）かきむしる[17]。(29)

猟師の提案と王の快諾

王様，あなた様の視線で見られた者たちにとって，いつの場合でも（王様の恩恵で）王様に相応しい食事は得がたいものではありません。しかし（それは）生まれてこのかたあったこともないので，私にとって好ましくはありません[18]。(30)
狩で殺された肉が私たちを生かせます（jīvitāyate）[19]。そこで（王様）ご自身の肉体を鳥の二倍分切り取って（私に）下さい。」(31)
心配の物思いに沈んでいた王は，彼の言葉を聞くや否や，急に喜びで満開の蓮華のような目をして，彼に答えた。(32)
「鳥と汝が等しく命の危機のさい，（２人の）生命を保護するための，このような方策が，とても賢明な汝によって明白に私に示された。(33)
私の心は，２人の生命の（どちらかの）危機というブランコに（-dolā-）乗っているかのように揺れ動いていたが，他ならぬ汝によって，まるで友によるかのように安定した状態に（dhṛtim）させられた。(34)
汝の視線という投げ縄によって縛られている鳥を解放しなさい。まずは当面，私の肉をもって（汝の）生命を維持しなさい。」(35)
真実語を誓いとする（satyapratijñena）王によって，憐憫の情からそのように言われると，大臣たちは毒を塗られた矢によって射られたかのように失神してしまった。(36)

王，自身の肉体を与えることを決意

「布施の時には，友達でも私に（それが）為になるか，ならないかと言うべきではない。」と考えて，彼の（王の）肉体を捨てる決心をする機会が訪れた。(37)
さて王は「私の身体から肉を切り取って秤に（tulām）乗せる者には黄金を与えるべし。」と告げた。(38)
それから，黄金を降らせるように与える王によって召還された人たちは，悪行にたいして理性が閉じられて，両耳を覆って出かけた。(39)

ダールナマティ，王の肉体を切り裂く

さて１人のダールナマティ（Dāruṇamati）という名の赤茶色の男が（kapilapiṅgalaḥ）[20]いた。（彼は）黄金を受け取ると，残忍な行為の用意をした。(40)
鋸のようにまっすぐ切断するのに長けているが，生まれつき捻じ曲がった心の持ち主である悪人たちにとって，その残忍さの故に，為してはいけない事は（akṛtyaṃ）[21]何もない。(41)
刀をもってしても出来ない物でも，それを戯れの言葉によって切り裂き（口），
どんな喋れないことでも，それを力ずくで行い（身体），
どんな出来ないことでも，それを心でまさに考え出す（意）。
卑劣な人間は行動に制限されることなく，あらゆるとんでもないことを撒き散らす[22]。(42)
さて，彼（のダールナマティ）は鳩を秤に乗せて，その（鳩）と同量の，王の右足の股から切り取られ

た肉を（秤のもう一方に）置いた[23]。(43)
さて王の最初の血の飛沫に触れた大地は，動転した（vihvalā）かの如く震動した。(44)

王，身体ごと秤に乗り，自身を布施しようとする

さて鳩の方が重く，（王の）肉の方が軽いと，「さらに肉を切り取って与えよ。」と王は言った。(45)
股や腕の（-ūrubhuja-）肉が切り取られても，それが鳥と同じ量にならなかった時，王は三界の揺らめきに等しい（-saṃśayatulām）秤に（tulāṃ）（自ら）乗った。(46)
腱を残すだけの身体となった王が自ら秤に乗ったとき，彼の捨施の頑固さに（tattyāga-durgraha-）恐れおののいた「名声」は（kīrtir），（女神たちがいる）ほかの方向に行った。(47)
その瞬間，王の壊れることのない堅忍さによって，女神たちの（tridaśa-aṅganānām）
髪飾り用の（dhammilla-）花輪で一杯の蓮華のような手は，驚きに満ち溢れ，彼の偉業に対してとても尊敬の念を（pūjādaraḥ）払った[24]。(48)

王の真実語と肉体の回復

王が秤に乗ってもまったく変化しないのを見ると，残忍な行為者は恐れて彼に尋ねた[25]。(49)
「この身体の布施による（dehadānena）あなた様の望みが何なのか私には分かりません。というのも身体を持つ生き物にとって（dehinām），あらゆる利益を得ようとする行動は（sarvalābhasamārambhāḥ）身体の為にあるからです。(50)
もし心が壊れていなければ（cittaṃ yadi na khaṇḍitam）[26]，身体の捨施にたいする（tanutyāge）真実を（satyaṃ）語って下さい。」
このように語っている彼に，王は顔に微笑みを浮かべて答えた。(51)
「予にはこの世で何も得たいと思うものは存在しない。しかし一切の世間の生類の利益のために，私は無上の（anuttarām）等正覚を（samyaksaṃbodhim）求める。(52)
もしこの心が壊れていなければ（akhaṇḍitam idaṃ cittaṃ yadi），その真実語によって（satyena tena），私の肉体は損なわれることなく本来の状態に（prakṛtim）戻るように。」(53)
このように言った途端，真実語を習慣とする（satyaśīlasya）王の姿は，傷が平癒して，欠けが満ちた満全の月のように輝いた。(54)
そして鳩と猟師が去ると，大きな喜びに満ちた[27]王は，太陽が昇った時，光輝いた（prakāśavibhavo）。(55)

過去世と現世との結節

「実に昔のサルヴァムダダ（Sarvaṃdadaḥ）という王は今の私であり，赤茶色の人間は（piśaṅga-puruṣaḥ）[28]今のデーヴァダッタ（Devadatta）である。
この出来事を思い出すことから，私は微笑みがこぼれた。」
このような師（仏陀）の話を聞くと，インドラ神は喜んだ[29]。(56)

ゴーパーラカ龍調伏物語
――『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第56章和訳――

『大唐西域記』（大正51，878c–878a）に瞿波羅龍（Gopāla）の話がある。これは王に無実の罪をなじられた牛飼いが，悪龍となって王を害しようと誓い，その通りになったが，釈迦によって怒りの気持ちがなくなり，釈迦や羅漢を供養した。また釈迦の真影を住処である洞窟に安置したという話である。

あらすじ

0．善人の礼賛（1）
1．人々は荒れ狂うゴーパーラカ龍の調伏を仏陀に願う。（2–7）
2．世尊は龍の調伏に向かう。龍王は岩の雨を降らして抵抗する。（8–20）
3．世尊は帰依した龍に恩恵を与え，過去仏も滞在した森に赴く。（21–25）
4．世尊はインドラ神に微笑みの原因を明かす。（26–28）
5．世尊は帰依した猟師に恩寵を垂れる。猟師は善行を望んで塔を建立。（29–30）

和　　訳

善人の礼賛

彼らを見ると憎しみの毒の熱が静まるような，
甘露の味のように涼しい，月のような（-indavo）善人は誰によって尊敬されないことがあろうか[30]。（1）

人々，荒れ狂うゴーパーラカ龍の調伏を仏陀に願う

ダーラームカという（Dhārāmukhasya）夜叉の（yakṣasya）場所から姿を消されると（antarhitas），それからすぐさま世尊は（Bhagavān）ヒングマルダナの（Hiṅgumardanam）都へ到着された[31]。（2）
その（都）でブラフマダッタ王によって（Brahmadattena）恭しく供養されると，（世尊は）彼の集会で（saṃsadi）有徳者たちに（dhanyānām）教えを（anuśāsanam）説かれた。（3）
都の人たちはそこに集まって，あらゆる災難が襲って来た時の（sarvāpad-vinipāteṣu）すべての生類の救済者である（trātāraṃ）世尊に告げた（vyajijñapuḥ）。（4）
「世尊よ，都の端に岩山があります。そこにゴーパーラカという（Gopālako）恐ろしく，調伏し難い（duḥsahaḥ）龍が（nāgaḥ）住んでいます。（5）
彼（の龍）は大きな稲妻をもって（mahāśaniḥ）[32]，家畜，人々，実った（saṃpannānām）穀物を破滅させます。誰もその邪魔をすることが出来ません。（6）
あなた様は制御されないものを制御し，静まらないものを静めるお方です。（あなた様の）お悲心は（kṛpā）このような災難において，庇護を求める（śaraṇaiṣiṇām）私たちの庇護所です（śaraṇam）。」（7）

世尊，龍の調伏に向かう

と言った後，彼らが立ち去ると，慈悲の倉である（karuṇānidhiḥ）世尊は，集会の中から姿を消されると（antarhitaḥ），岩山に（pāṣāṇa-bhūdharam）赴かれた。（8）
恐ろしい山の斜面に，その恐ろしい龍の（bhoginaḥ）住処を，世尊は見られた[33]。（住処は龍の）吐く毒の息によってかのように，水が真っ黒くなっていた。（9）

波立つむき出しで無慈悲な（-niṣkośa-nistriṃśa-）波の群れに満ちたその（水の）岸に，世尊は結跏趺坐を（paryaṅkaṃ）結んで[34]座られた。(10)
清澄な甘露のような視線と結びついた（-bandhunā），情愛ある目によって，彼（の世尊）はすぐさま毒のある（saviṣaṃ）水を（viṣaṃ）毒のない状態に（nirviṣatām）導かれたかのようであった。(11)
黄金の輝きを放つ彼（の世尊）は，身体を青黒い水に反映させておられた。まるで太陽が空中に入ると，エメラルドが反映しているようであった。(12)
龍の住処の上の暗黒は彼（の世尊）の輝きに貫かれて，まるで逃げようともがく獲物のいる網のような状態となった。(13)
龍王は彼（の世尊）を見るや，血のように赤い目をして，突然空中に昇ると，世界を雨雲で出来たかのようにした。(14)
彼（の龍）の怒りの火煙の（krodhāgnidhūma-）集合のような，雲から現れ出た稲妻の舌先によって（vidyujjihvair），本来揺れることのない四方も，恐れおののかされたかのように（揺れた）。(15)
興奮した雨雲の，宇宙の破滅の始まりを表すような雷鳴によって，山々の[35]洞窟は（guhāgehāny）[36]裂かれた。まるで王たちの心臓が（hṛdayāni）裂かれたかのように。(16)
それから，大きな岩の集まりで一杯になった雨は，保持できなくなって降ってきて（papāta pātitadhṛtiḥ），木々を粉々にし，山々を攻撃して断片の連続にした（-śakalāvalī）[37]。(17)
凶暴な龍から吐き出された雨は仏陀の（tāyinaḥ）[38]視線だけによって，新風の輝きで光り輝く花の雨の状態と（kusumavṛṣatām）なった。(18)
その（山の）森が輝き清浄になって，災難から解放され（anupaplavāni），花々には黒蜂がぶんぶん歌っているのを見ると，
森の女神たちは（vanadevatās），（彼女らの）喜びの微笑みの広がりの方が勝った大玉真珠のネックレスを着けて，その残忍な龍王に（phaṇīndram）言った[39]。(19)
「おー，黒雲（をもつ龍）よ，そして怒りを捨てなさい。
あなた方のような龍が宇宙の破滅の風に（pralayamāruta-）傷つけられて，痴態をとる臀部の秘部のような，その（山の）揺れる側面の穴に庇護を求める[40]，その（山）とは，まったく動揺することのない須弥山（Kanakācala）しかありません。」(20)

世尊，帰依した龍に恩恵を与える

すると，急に興奮が（madaḥ）消え，怒りを（vikriyaḥ）捨てた龍は，師に近づくと，合掌して頭を下げた[41]。(21)
彼の（龍が）帰依すると（yātasya śaraṇaṃ），慈悲の倉である（karuṇānidhiḥ）世尊は，戒律を（śikṣāpada-）与えて，善行を最高とする恩恵を与えた（cakre anugraham）。(22)
（世尊の）足に王冠がくっつくほど（頭を下げた）彼（の龍）によって恭しく請われた勝者（世尊）は（jinaḥ），彼の（龍の）住居に（その度に）いつも赴かれた（saṃnidhiṃ vidadhe）。(23)
そのとき，彼の（世尊に）信愛を抱いた，金剛のような手を持つ夜叉を（yakṣasya）静めるために世尊は，恩恵を与えられた（cakre anugraham）。(24)
世間を苦しめる，比類なき（龍を）調伏すると，師は賛辞を（-stutipada-）広めた三十三天によって（-tridaśa-）供養されながら，
過去仏の（pūrvabuddha-）蓮華のような足によって親愛の心で清められた岩のある森に，楽しみながら（viharann）赴かれた[42]。(25)

世尊，インドラ神に微笑みの原因を明かす

そこで（世尊の）示現を（saṃdarśana-）[43]得たインドラ神によって，微笑みの原因を尋ねられると，一切智者は（Sarvajñas）微笑みながら応えられた[44]。(26)
「功徳水のある清澄な池のある，敵対心のない生類に好まれた，これらの苦行林の（tapodhaneṣu），
ダルマの住処のような（dharmādhivāsa-）聖者の心を清める，寂静の場所に私だけが住んだのではない[45]。(27)
光輝く拘留孫仏（Krakucchandaḥ），善逝の拘那含牟尼仏（Kanakamunir），寂静で汚れなき心をもつ等正覚の迦葉牟尼（Kāśyapamuniḥ），
インドラ神よ，あらゆる世間の苦しみを（癒す）医者である（これらの過去仏たちは），この人気のない，子獅子が雌獅子の乳房に愛着するように，白い森に[46]滞在されたのだ。」[47] (28)

世尊，猟師に恩寵を垂れる

このように彼（の世尊）が語られていると，１人の猟師が，功徳が熟したため傍らにやって来て帰依した（śaraṇaṃ gatasya）。（世尊は）示現によって（saṃdarśanair），戒律に相応しい（śikṣāpadārhaṃ）寂静を（śamaṃ）示された[48]。(29)
猟師は（lubdhakaḥ）世尊の恩寵により祝福された者となり（bhāgyavān），心は善行を熱望し（-lubdha-），そこで獅子（である世尊）のために，彼（の世尊）を示すような爪や鬣の特徴をもつ塔を（caityam）建立した[49]。(30)

仏塔物語
――『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第57章和訳――

仏塔（stūpa）に関しては，杉本卓洲博士による最近の著書『ブッダと仏塔の物語』（大法輪閣，2007年）に，これまでの研究文献が網羅され，主な内容が説明されている。

あらすじ

0．仏塔礼賛（1）
1．世尊は過去仏の仏塔に自らの仏塔を建立し，法の説示を行う。(2–4)
2．世尊は石山に５番目の仏塔を建立する。(5)
3．組合長のスプラブッダは如来を供養し，仏塔を建立する。(6–8)
4．如来は夜叉のダンバラを調伏。(9)
5．如来はチャンダーラ女と７人の息子を調伏。(10–12)
6．ポータラ居士，仏塔を建立。(13–15)
7．大地の震動。(16)

和　　訳

仏塔礼賛

名声が仏塔によって輝くような人たち[50]，彼らは処女の耳や頭飾りの坪に善き美徳が乗せられているよ

うに（輝き），世間の人を凌駕する[51]。(1)

世尊，過去仏の仏塔に自らの仏塔を建立し，法の説示を行う

さて世尊は（Bhagavān）生気ある[52]インドラ神によって乞われると，その過去仏によって（pūrvabuddha-）作られた仏塔に[53]，（世尊）自身の仏塔を建立された。(2)
宝石よりなり，何百もの太陽のような輝きを放つ，その（仏塔が）神々によって作られると，大きな迷妄にも似た（mahāmohopamaṃ）暗闇は（tamaḥ）世界のどこかに行ってしまった。(3)
そこで，キンナラ・ガンダルヴァ・人間・ナーガ・神々たちに，法の教訓と戒律とを（dharmopadeśavinayaṃ）説示して，勝者は（jinaḥ）立ち去られた。(4)

世尊，石山に５番目の仏塔を建立

石山に 4 つの仏塔が神々によって建てられた時，世尊は 5 番目の仏塔を 5 つの仏塔とともに[54]建立された。(5)

組合長のスプラブッダ，仏塔を建立

さて，如来はバーロークシャという（Bālokṣa-）名の場所に到着されると，組合長の（śreṣṭhinā）スプラブッダによって（Suprabuddhena）供養された。それはまるで（財宝の神）クベーラ神によって（Kubereṇa）[55]（供養されるかの）ようであった。(6)
（如来は）彼に法と律とを（dharmavinayaṃ）教授された。それによって彼のスプラブッダは従者ともども，迷妄の眠りが消滅して（mohanidrākṣaye），覚醒した状態と（prabuddhatām）[56]なった。(7)
彼は世尊の教えによって，あたかも自身の（仏塔）であるかのような，功徳あり，そびえたち，宝石で輝く，バーロークシーヤという（Bālokṣīya-）名の仏塔を建立した。(8)

如来，夜叉のダンバラを調伏

さて如来は，ダンバラという（Dambara-）村におもむろに到着されると，ダンバラ（Dambaraṃ）という名前の夜叉を（yakṣaṃ）調伏されて（vinīya），戒を（śikṣāpada-）授けられた。(9)

如来，チャンダーラ女と７人の息子を調伏

チャンダーラの村に近づかれると，チャンダーラの女を（caṇḍālīṃ）彼女の 7 人の息子ともども適切な行動に服するように（vinayopanatāṃ）させられた。(10)
彼ら（息子）は業の残りによって（karmaśeṣa-）マータンガの家（-mātaṅgakula-）に生まれて汚されていたが，勝者と出会うことより（jinadarśanāt），蓮池のような清浄な状態となった。(11)
他の[57]，より汚され，嫌悪され，悪行の熱で大きな災難に苦しむ者たちに対して，
善者たちは，哀れみの心を発動させて，邪な思いなく，困窮者を援助したいという思い以上のものとなる[58]。(12)

ポータラ居士，仏塔を建立

それから善逝は（Sugatas）従者とともにパーターラの村に（Pāṭālagrāmaṃ）到着されると，ポータラという（Potala-）名前の居士のために法に関する善き話を（dharmyāṃ satkathām）なされた[59]。(13)
彼は善逝の恩恵によって（Sugatānugraheṇa），戒律を（śikṣāpada-）得て清浄となり，彼の（善逝の）僅かの髪や爪を部分とする宝石の仏塔を造らせた。(14)

そこに会見にやって来たインドラ神に世尊は予言された。「ミリンドロー（Milindro）[60]という名前の王がこの場所に仏塔を造るであろう」と。(15)

大地の震動

以上，あらゆる場所に対して（sthāne sthāne）世尊が慈しみに濡れた視線を投げかけることより，あらゆる世間の生類は悲しみと迷妄と恐れがなくなった（śokapramohabhayojjhitaḥ）。
新しく作られたばかりの仏塔の内でチンチンと音をたてる宝石の鈴の群れ（にあわせるように），大地はブーン・ブーンと音をたてて戯れのように揺れた[61]。(16)

プニャバラ王物語
――『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第58章和訳――

あらすじ

0．慈悲で満たされた医師の尊敬（1）
1．プニャバラ王は新しい園林に向かう折，車から道ばたで食糧もなくて疲弊している病人を見る。哀れみの心に捕らわれて，あらゆる地域を巡錫し，苦しんでいる他者を見るや，自分のことのように苦しむ。彼はすべての門や十字路，さらにあらゆる町に，病人のための食事や薬，部屋や寝台を作らせる。(2–8)
2．王は彼らのために巧みな介護士を任命する。王は彼らを呼び出し病人の介添えを昼夜するように命じる。王によって命じられた彼らは病人らのもとへ行き，病人治療にあたる。(9–17)
3．王は病気から放たれた人々を自ら見るべく巡錫に出かける。インドラ神は6つの牙を持つ白い象をつなげた戦車を作り，巡錫の道には，心地良く触れる風に揺れる金や宝石の蓮があり，雌の黒蜂が歌う神々しい蓮池を作る。そこには天女たちがいて王に奉仕する。(18–21)
4．インドラ神は王の美徳の程度を確かめるべく，目の不自由な者の姿をとって彼に近づき，右目を布施するよう請求する。王は衆生済度のために，そして等正覚の完成のために，誓願を立てて，刀をもって眼をくり抜き与える。大地の震動。王がもう1つの目を布施しようとする瞬間，インドラ神は彼本来の姿に戻り，王に健康な目を与え，彼の非常に強い美徳性を称える。(22–30)
5．結語（31）
6．過去と現世との結節（32）

和　　訳

慈悲で満たされた医師の尊敬

慈悲で満たされているため，起こった災難を鎮める方法を観察する清澄な情愛によって，人々の病気を治すものの，（本来は）人間の生存を侮蔑し動揺させるような（bhava-paribhava-kṣobha-）医師たちは，実に非難されるべきでないどころか，尊ばれるべきである。彼らはあらゆる善徳を大地から生み出す，完成した甘露（sudhāṃ）[62]を内包している。(1)[63]

プニャバラ王と彼の王宮

プシュカラーヴァティー（Puṣkarāvatī）という町で世尊は微笑んでいると，微笑みの理由をインドラ神によって問われ，（世尊は）答えられた。(2)[64]
かつてプニャバラという（Puṇyabalo）名の光輝ある王がいた。彼は 8 万の都市を所有していた。(3)
彼の王にはプニャバティー（Puṇyavatī）という名の王宮が（rājadhānī）あったが，（それは）水晶の家のように美しく，月光のように輝いていた。(4)

王，道端で病人を見，町中に介護施設を建設

ある時，彼は新しい園林に向かう折（yātrāyāṃ），車に乗ったままで，道端で（pathi）食糧もなくて（pathya-virahāt）疲弊している病人を見た。(5)
彼は長患いで憔悴した不幸な彼（の病人）を見て，哀れみの心に捕らわれて（-ākrāntaḥ）大いに困惑した。そして（彼は）あらゆる地域を巡錫した（krānta-）。(6)
苦しんでいる他者を見るや，直ちに物事を映し出す鏡のような（saṃkrāntidarpaṇāḥ）善人というものは苦しむものである。まるで彼らが日長石で（sūryakānta-）出来ているかのように。(7)
彼はすべての門や十字路，さらにあらゆる町に，病人のための食事や薬，部屋や寝台を作らせた。(8)

王，介護士に命令する

さらに彼らのために，巧みな介護士を（paricārakān）任命した。というのも病気治療の第一の要素は善き介護士であるから。(9)
患者は（kṣamaḥ）気弱になって（karuṇārdraḥ）耐えながら（kṣāntaś），医者の（cikitsaka-）指示に従っている。愛の故に疑うことのない（avicikitsakaś）[65]介護士は得難いものである。(10)
それから，王は自らを律した介護士たちを呼び出し，病人の介添えを（rogiparicaryā）昼夜するように命じた。(11)
「王に相応しいような部屋に，病人たちの為に，美しい寝台などの家具が作られ，宝石の階段があり清浄な水をたたえた蓮池が（padminiyaś）（作られた）。(12)
より豊富な医師と薬とが完全に備えられた。『今や，彼らの健康は汝らに依存している。』これが私の意図である。(13)
冷たさによって熱を鎮める。心地よい熱によって冷たさを（鎮める）。冷たい水によって何度も渇きを（鎮める）適量の，滋養ある食事の給仕によって疲労を（鎮める）。
「君は健康である。」という優しい言葉によって不安を（鎮める）。一連の娯楽によって不快を（鎮める）。この世でもあの世でも，人々にとって介護士は確かな治癒方法（bhiṣagdharmaḥ）である[66]。(14)
それ故，汝らによって苦しんでいる者たちの病気の治癒を行わなければならない（sīdatām）[67]。治療によって病人の苦しみは滅せられる。繰り返しの言葉による，この励ましの心がけが為されなければならない[68]。(15)
清浄なる仏は過失なき医者であり，ダルマの教えは最高の薬草である。輪廻の長き熱で干からびた人々にとっての目標は寂静の感情に（śāntirasa-）[69]向かうことである。」[70] (16)
以上のように，富を降らせる（vasuvarṣiṇā）彼の王によって命じられた彼らは，（病人らのもとへ）行って，実に病人治療のために適切な（治療を）行った[71]。(17)

王の巡錫とインドラ神の化作

そして彼の巧みな言葉によって，彼に（感謝の）思いを致した，病気から放たれた人々を自ら見るべく，王は巡錫に出かけた。(18)
一方インドラ神は，比類なきインドラ神の（aparaśakrasya）福徳で輝く 6 つの牙を持つ白い象をつなげた戦車を作った。(19)
（巡錫の）道には，心地良く触れる風に揺れる金や宝石の蓮があり，雌の黒蜂が歌う神々しい蓮池を作った。(20)
これらの宝石の蓮の中にいる舞踊の技芸に専念した天女たちは（suranāryaḥ），遠くからやってきた王に奉仕した。(21)

インドラ神，目の不自由な者の姿になって王に目を乞う

美徳という甘露の海である（sattvasudhāsindhoḥ）彼の美徳（の程度）を（sattvaṃ）確かめるべく，インドラは自身を目の不自由な者の姿となって（andharūpam），彼（の王）に近づくと言った。(22)
「王よ，私には眼がなく，生まれつき光を（janmāloka-）失っています。そこで一切衆生を救済する（sarvasattvaparitrāṇa-）用意のあるあなた様のもとにやって来ました。(23)
これらの病人たちはあなた様の力によって（prabhāvena）健康になり，輝く美しさになって，あなた様の名声の話を（kīrtivāda-）しゃべっています。(24)
王よ，苦しみ惨めな目の不自由な者の縁者よ，私を救いたまえ。もし出来るなら私に右目をもたらしたまえ。」(25)
このように彼に乞われると，清浄な顔の輝きある王は衆生済度のために（saṃtāraṇāya jagatāṃ），そして等正覚の完成のために（samyaksaṃbodhisiddhaye），(26)
誓願を立てて（praṇidhānaṃ samādhāya），刀をもって眼をくり抜き，堅固さの宝庫である（王は）彼に与えた。（すると王は）神々によって花々で満たされた。(27)
彼のとてつもない布施によって，驚いたかのように，さざ波立つ海に囲まれた全ての大地は，山ともども動揺した。(28)
王は片目で（目の）光を生じた彼を見て，大きな施しへの情熱を喜んで，もう 1 つの（目）を与えようとした。(29)
それからインドラ神は彼本来の姿に戻って，（王に）健康な目を与え，（彼の）非常に強い美徳性を称えた。(30)

結　　語

自らの肢体を布施する瞬間でさえ，決して愛着のかけらも生じない，
そのような力強い美徳の海である彼には，財という埃のようなものに対しどんな彼自身の計らいがあろうか。(31)[72)]

過去世と現世との結節

その時の布施の喜びに満たされた心を持つそのプニャバラ王こそ他ならぬ私であった。
彼の稀有な出来事を思い出すことによって微笑が生じ，彼のことで頭が一杯になった（tanmayatām）。(32)

注

1）岡野潔「Avadānakalpalatā 第55章，91–92章と Karmaśataka 125–126話—Sarvaṃdada, Śibi, Maitrakanyaka の校訂，和訳—」『南アジア古典学』第 3 号（2008年）57–155頁。以後岡野（2008）と略す。

2）町田順文「シビジャータカについて」『印度学仏教学研究』第28巻第 2 号（1980年）636–637頁。松村恒「シビ本生話と捨身供養」『印度学仏教学研究』第52巻第 2 号（2004年）76–82頁。

3）韻律は Vasantatilakā。

4）Apte の辞書によれば，これは半神の名前であり，夜叉と同様，クベーラ神の従者でこの神の財宝の守りてとされる。

5）ここから第 5 偈までの韻律は Śloka。この偈がどうしてこの箇所にあるのかはっきりしない。要検討。

6）原語 aṃśuhāsinī は今ひとつ意味がはっきりしない。aṃśuhastinī（太陽）の可能性もあろう。

7）韻律は Vasantatilakā。岡野（2008: 63）は，二重の意味があるとする。象の場合は，sukṛtasāra（最良の），daśāviśeṣa（衣服縁），vinayavartman（調教の道），dāna（愛液）。王の場合は，sukṛtasāra（善行の精髄），daśāviśeṣa（卓越した境遇），vinayavartman（戒律の道），dāna（布施）。

8）ここから第26偈までの韻律は Śloka。

9）原語は paribhraṣṭaḥ pluṣṭapakṣa であるが，de Jong（1979: 93）は paritrastaḥ srastapakṣa（恐れては羽根をおろし）と読むべきとする。

10）テクストの読みは -kamalālīlā-。ここでは「蓮華の揺れる」と訳した。岡野（2008: 65）は kamalā をラクシュミー女神と厳密に解釈して「蓮女（女神ラクシュミー）の優雅さ」と訳す。さらに de Jong（1979: 93）が指摘するように，異読の可能性もある。つまり -kamalālinā である。この場合，kamala＋ālinā（蓮の列・蓮群を有する）と kamala＋alinā（蓮と蜂）と解釈することも可能であると岡野（2008: 65）は指摘する。

11）テクストの読みは adhunaivāpariccchinnanijecchāsaṃmatādaram/。岡野（2008: 70）は Hahn 教授の示唆を受けながら，adhunaivāpariccchinnaṃ nijecchāsaṃmataṃ varam（絶えざる，御自身の欲求が尊重された，最高の）という読みの可能性を指摘する。

12）岡野（2008: 70）は「賜物」と訳する。

13）韻律は Śikhariṇī。

14）de Jong（1979: 93）は tad bhaktaṃ（その食事は）と読むべきとする。

15）韻律は Śloka。

16）原語の avātta- を「得られた」と訳した。de Jong（1979: 93）は，avāpta- と読むべきとする。その場合でも訳は同じ。

17）韻律は Śikhariṇī。

18）ここから第41偈までの韻律は Śloka。

19）これは jīvita（命）の動詞形。

20）第56偈は piṅgalapuruṣaḥ「赤色の男」とある。岡野（2008: 76）はチベット訳の「目が茶色・赤茶の者」という解釈を紹介する。

21）岡野（2008: 76）は akṛtyaṃ の解釈に「してはいけない仕事」と「切ってはならないもの」（akṛtya, akartya）の二重の意味があることに着目し，この偈全体を二重の意味があると指摘する。⑴鋸の場合：sarala「まっすぐな（木）」，nisargataḥ「自然に」，vaktrāṇāṃ「歪んでいる」，krauryāt「硬さにより」，akṛtyaṃ「切ってはならないもの」，⑵人の場合：sarala「正しい（者）」，nisargataḥ「生まれつき」，vaktrāṇāṃ「ねじけた」，krauryāt「残忍さの故に」，akṛtyaṃ「してはならない仕事」。

22）韻律は Śikhariṇī。

23）ここから第47偈までの韻律は Śloka。

24）韻律は Vasantatilakā。

25）ここから第55偈までの韻律は Śloka。

26）真実語を語る場合，その前提条件として「心が壊れていない」ことがあげられる。真実語（saccakiriyā, satyavacana）とは，「真実の言葉を発することによって何らかの目的，それも通常では実現不可能なことをなしとげようとするものである。原則的には「真実」そのものの中に秘められていると信ぜられる力によってきわめて現実的な欲望を処理しようとするもので，この意味で呪術の一種である。」奈良康明「「真実語」について—仏教呪術の一側面—」『日本仏教学会年報』38号（1973年）19–37頁。その他ヴェーダ以来の真実語についての考

察は，若原雄昭「大乗仏教と真実語（satyavacana）」『宗教研究』283号（1990）132–33頁を参照。

27）原語は mahotsavaḥ。岡野（2008: 81）は「大祝祭」と理解する。

28）第40偈では「赤茶色の男」（kapilapiṅgalaḥ）という形で登場したが，ここでは「赤茶色の人間」（piṅgala-puruṣaḥ）という形で表われた。

29）韻律は Vasantatilakā。

30）韻律は Āryā。

31）ここから第18偈までの韻律は Śloka。

32）意味がいまひとつはっきりしない。mahāśanaḥ（大食いの）の読みの可能性あり。

33）龍の住所として，大雪山の山頂にある池の中があげられる。『大唐西域記』（大正51，874b–c）。

34）テクストの読みは buddhaḥ（仏陀は）であるが，ここでは de Jong（1979: 95）に従い，baddhaḥ（結んだ）と読んだ。

35）原語 bhūbhṛtām は「山」と「王」の 2 つの意味を持つ。

36）原語 guhā は「洞窟」と同時に「心臓」の意味を持つ。たとえば Kaṭhopaniṣad 4.6.7等を参照。

37）龍の攻撃として，暴風雨を起こし，木々を催抜し，沙石を雨のごとく降らすとされる。『大唐西域記』（大正51，874c）を参照。

38）原語 tāyin は，trāyin（守護者）と関連するか，あるいはパーリ語の tādin（そのような人，賢者）あるいは tādṛśa(ka)，tādṛ(n) と関連するのか，検討を要する。

39）第19偈と第20偈の韻律は Vasantatilakā。

40）原文 līlānitambakuharaṃ を，女性を修飾する意味と，山を修飾する意味との両方に理解した。

41）ここから第24偈までの韻律は Śloka。

42）韻律は Vasantatilakā。

43）示現（saṃdarśana）とは，仏や菩薩が衆生済度のために様々に身を変えてこの世に現れること。

44）韻律は Śloka。

45）テクストの読みは śānteḥ padeṣu nu mayaiva kṛto vihāraḥ であるが，de Jong（1979: 95）も指摘するように，nu ではなく否定辞の na の方が意味的にすっきりする。多くの写本も否定辞の方を記している。ここでも否定辞の方を採用して訳した。韻律は Vasantatilakā。

46）先の苦行林を指す。

47）韻律は Śikhariṇī。

48）韻律は Upajāti。

49）韻律は Rathoddhatā。杉本（2007：183–184）によると，『造塔功徳経』（大正16，801a–b）に，ブッダは「塔内に仏舎利・髪・歯骨・髭・爪，それらの一部，あるいは法蔵の十二部経，最低でも四句偈を安置するならば，功徳は梵天のごとくで，死後梵天界に生まれるであろう」と説いた，とある。さらに杉本（2007: 206–207）は『十誦律』に髪塔と爪塔の建立に関して非常に詳細な塔の建立法・供養法が説かれていると言う。

50）テクストの読みは te jayanti jagad yeṣāṃ yaśaḥ stūpair virājate。de Jong（1979: 97）は，te jayanti jagaty eṣāṃ yaśaḥ stūpair virājate（彼らは世間で勝利する。彼らの名声は仏塔によって輝く。）の読みが好ましいとする。

51）ここから第11偈までの韻律は Śloka。

52）テクストの読みは, prāṇāvanārthitaḥ であるが, 意味がいまひとつはっきりしない。ここでは prāṇavatārthitaḥ と読んだ。

53）アショーカ王はコーナーカマナ仏のストゥーパを再度増築したとある。杉本（2007: 61）を参照。

54）5 番目の仏塔の周囲に 5 つの仏塔があることか？

55）クベーラ神は夜叉の王として有名である。また夜叉は仏塔の守護神（護塔神）として知られている。杉本（2007: 86–89）。

56）本人の名前のスプラブッダ（良く覚醒した）を字義通りに prabuddhatām（覚醒した状態）と説明している。

57）テクストの読みは anyeṣu。de Jong（1979: 97）は antyeṣu（最下層の者）と読むべきとする。

58）韻律は Vasantatilakā。

59）第13，14偈の韻律は Śloka。

60）de Jong（1979: 97）は，Milndo（ミリンダ）と読むべきとする。ミリンダ王は Miliñdapañho『ミリンダ王の問い』で有名。彼の王については，森祖道，浪花宣明『ミリンダ王――仏教に帰依したギリシャ人』清水書院，

1998を参照。

61）韻律は Hariṇī。

62）de Jong（1979: 98）は sudhāsiktām（甘露に浸された）の読みが望ましいとする。そうすれば,「あらゆる善徳を生み出す，甘露に浸された大地を」という訳になろう。

63）韻律は Śikhariṇī。

64）ここから第13偈までの韻律は Śloka。

65）「医者」（cikitsaka-）と「疑うことない」（avicikitsakaś）には言葉の遊びが見られる。

66）韻律は Śārdūlavikrīḍitam。

67）√sad の命令形と具格の構造と解釈した。

68）韻律は Śloka。

69） 8 の rasa に śānta-rasa を加えて 9 とする場合もある。

70）韻律は Upajāti。

71）ここから第30偈までの韻律は Śloka。

72）第31，32偈の韻律は Upajāti。